様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１７５０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０６２９

研究課題名（和文）ＷＥＢを利用した欧米大学に留学する日本人学生の人間関係構築過程に関する縦断的研究

研究課題名（英文）A Longitudinal Study Utilizing the WEB on the Process of Interactions between Japanese Students Studying at European and American Universities and their academic and social Environment.

研究代表者
隈本　順子（Kumamoto, Junko）

大分大学・国際教育研究センター・教授

研究者番号：６０３３６２４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：　欧米の協定校に1年間留学した日本人学生の人間関係の実態を留学前、留学中、留学後に分け縦断的に人間関係構築過程について2回調査した。第1回調査では英語力不足を克服した者は、周囲の人間関係の広さと深さにおいて克服しなかった者に比して勝っていたことが観察された。
「異文化友人関係の形成過程モデル」を使い「住環境」と「友人関係構築」の関係に関する事例研究でも教育環境、英語力も同じ2名の学生の留学成果が大きく異なった要因は、住環境の違いに起因する友人関係形成の違いであった。帰国後の調査でも、概ね留学成果を高く自己評価した者は、その理由の一つとして良好な人間関係の構築にあったと回答している。

研究成果の概要（英文）：A longitudinal study involving questionnaires and interviews on Japanese students' interactions over two semesters with their hosts during the period of their study abroad was conducted at three different stages; before, during and after their study abroad. In the investigation of the first cohort it was observed that a group of students with successful interactions overcame the lack of communication ability due to poor English skills as compared to a group with less successful interactions. A case study utilizing "a model of formation process of cross-cultural friendship" showed that two students whose English skills and educational circumstances were very similar experienced vastly different levels of satisfaction; this result was solely due to differences in the way they interacted with others in their respective accommodations.
In conclusion, the majority of students with high satisfaction levels state that it was due to excellent interactions they experienced while abroad.

研究分野：人文学・国際教育

キーワード：海外留学　異文化適応　異文化交流　人間関係　留学動機

１．研究開始当初の背景

(1) 本学では欧米の国際交流協定校（以下、協定校）から留学生を多く受け入れているが、本学に留学中に日本人とどのような異文化交流をしているのか、日本での異文化適応について 2005 年から数年間調査研究した。当然、次のテーマとして、欧米の大学に留学する日本人学生の異文化環境での人間関係の構築、異文化適応等について研究することとなった。

(2) 異文化環境で留学生活をおくった日本人学生達に帰国後、その成果について聞き取り調査を数回行ったが、人間関係の因子が大きく関わっていることが観察された。それに関して留学前から留学後まで彼等の留学生活を追跡調査し実証的な研究へと発展させたいと考えた。

(3) 平成 21 年度(2009 年度)に「派遣留学の拡大と学生の動機づけの研究」が学内の「全学研究推進機構」の研究プロジェクトとして採択され、本研究の予備調査としてまず、日本人学生の留学動機に関する研究に着手した。翌年度の調査結果によると留学中の人間関係がこの動機の維持、増幅に大いに関わっていることが示唆され、留学動機も含めてプロジェクトをたちあげた次第である。

２．研究の目的

(1) 本研究は、欧米の協定校に留学する本学の日本人学生を対象として、日本出発から帰国まで１年間の留学中の人間関係構築の過程を縦断的に追うことにより「異文化適応力」習得の過程を研究することが目的である。まず、留学動機の変動についても人間関係がその変動にどのように関係してくるのかも観察する。

(2) 本研究では、異文化適応力に関係する要因は人間関係がうまく構築できるか否かに関わっていることをまず、明らかにすることである。また、それ以外に被験者のコミュニケーション能力、性格、異文化に対する態度等も異文化適応力に関連する因子と考えられるので調査に加えた。

(3) 個々の日本人学生の異文化適応力習得過程の解明を目的として人間関係の構築過程を１年間にわたって質的方法で縦断的に追った。その中でケース・スタディとしていくつか事例研究も取り上げ、留学中の人間関係が留学成果の自己評価にいかに重要に関わっているかを解明することが目的である。データ分析を質的方法で行ったのは、アンケート調査による量的分析だけでは見えてこない、その過程の解明が目的であるからである。

３．研究の方法

(1) 平成 24 年度の秋と 25 年度の秋から、米国・欧州の協定校に 1 年間留学する日本人学生を一サイクルとして被験者を選定し、留学前・留学中・留学後の段階でそれぞれアンケートとインタビューによって 2 年分データを収集した。留学中はメール、ブログ、アンケート等を用いてデータ採取に努めたが、可能な限り留学中の学生に直接面談しデータを取った。平成 24 年度中に収集したデータは質的研究法を用い、その解析は 25 年度に行い、25 年度中に収集したデータの解析は 26 年度に行った。

(2) 研究方法としては基本的には質的研究法の観点からインタビュー法を用いたが、アンケート手法も同時に利用したが、インタビューの補助データとし、数が十分でないので統計による量的分析は行わなかった。今後、長期的に研究を継続し、被験者数がある程度蓄積されれば量的方法も可能になり、質的・量的研究法を組み合わせた統合的方法も可能性も探りたい。

４．研究成果

(1) 本研究の調査対象者総数は 22 名であり、その内訳は平成 24 年秋から 1 年間留学した学生が 14 名、25 年秋からは 8 名である。彼等全員に留学する前に留学動機についてアンケート調査を行った。学習動機の定義は Zoltan Dornyei の言語学習動機の定義を、また留学動機づけの枠組みとしては Edward Deci と Richrad Ryan の自己決定説(Self-Determined Theory)理論を援用した。この理論は自己決定性が一番低い「無動機」、次に「外発的動機」、そして自己決定性が一番高い「内発的動機」へと分かれる。外発的動機はさらに自己決定性や自律性の度合いによって 4 段階に分かれ、最も自律性が低い「外的調整」から、「取り入れ的調整」、「同一視的調整」、「統合的調整」へと高くなっていく。22 名全て「外発的動機」であったが、「外的調整」が 2 名、「取り入れ的調整」が 4 名、「同一視的調整」が 12 名、「統合的調整」4 名であった。とうぜんのことながらかなり高い自己決定性を示している。また、動機づけとなった外発的要因として友人、先輩、教員からの影響が大きい。

Dornyei の定義によると動機とは「人の行動の方向性と強さ」であり、留学動機は人の意識を留学に向かわせ（＝方向性）留学のための外国語学習等を開始したり継続したりする原動力(＝強さ)である。動機の強さは連続する一定の方向線上で強くなったり弱くなったりし、または、全くなくなったりして時によって変化するものであると捉える。今回は留学前と留学後の動機について調査したが、留学後全ての学生の自己決定性の段階が高くなっていることが観察され、「内発的動機」に到達したと思われる学生が 2 名いた。留学中は様々な困難に遭遇し彼等の動機は一時的には弱まることはあったと伺えるが、最終的には課題を克服したという。その克服していく過程では、留学当初は日本にいる親や友人に頼る傾向があったが、留学期間が長くなるにつれ現地で構築した新しい人間関係によって克服している。概ね、留学前の彼等の動機は「自己決定性」が高いことが確認された。その留学動機を留学中もある程度維持し、留学後の成果・満足度にも関係する要因は、良好な友人関係の構築にあるとする者が多い。

(2) 事例研究として取り上げた 2 名の学生のケースは、同じ大学環境で英語力もほぼ同じレベルで留学をスタートした学生たちの最終的な留学成果が異なった要因は、住環境の違いに起因する友人関係の形成にあった。

工藤和宏の「異文化友人関係の形成過程モデル」を使い、欧州の大学に留学した学生の「住環境」と「友人関係構築」の関係を中心に考察した。工藤のモデルは 4 つの段階があり、第 1 段階は、日本人留学生が他人との接触する機会を持つことが必要であるとする。まず、住居や大学でホスト（現地学生、留学生等）と接触することである。これを「物理的・機能的・社会的接近性」と呼ぶ。そして、その接触から「自己開示・共行動」をしながら、お互い「友人観・相性の合致」を確認する第 2 段階に入る。そして、次は「関係的・異文化アイデンティティの形成」をする第 3 段階へと発展していく。最後の第 4 段階は、その形成を強化する段階である。

学生 A と B はアパートタイプの学生用の住居に住んでいたが、その住形態は大きく異なっていた。留学当初、共に英語運用能力は低かったが、留学 6 ヶ月後、両者の英語でのコミュニケーション力に大きな差が出てきた。異文化友人関係の構築過程について、学生 A の場合は、そもそも第 1 段階である「ホストとの接触が始まる機会」がなく、友人構築に発展する過程は観察できなかった。しかし、学生 B は第 1 段階から次の段階、共に行動し留学生の中から相性の合致する人を見つけ、「関係的・異文化アイデンティティの形成」、そして、「その強化」へと進んでいったことが観察された。同時に、その友人構築

の成果が英語の運用能力を伸ばし、後期授業の履修を容易にし、前期で帰国してしまった留学生の代わりに、現地学生との交流の機会も増えホストの中身も変容していった。このような友人関係構築の相違が二人の留学成果に関する自己評価の違いに影響されたことは明白である。この場合、学生にとって留学当初いかに多く「接触する場」があるかどうかが重要であり、さらに学生がそれを友人関係構築の機会と捉え、自らイニシアティブを取って積極性に進めていくことも必要である。

(3) 留学中の人間関係構築過程を探るだけでなく、平成 25（2013）年秋から 1 年間留学した学生については彼等のコミュニケーション能力、性格、異文化に対する態度に関してアンケートとインタビューによって調査した。

① 語学力･コミュニケーション能力が優れていれば、異文化環境で第 1 歩を踏み出す際は有利であるが、4 名の学生学生を除く被験者 18 名はその能力に秀でてはいなかった。しかし、16 名は最初の能力不足のショックを克服し様々な方法を使って語学力・コミュニケーション能力が次第に上達させていったことが観察された。さらに調査が必要だが、今回の調査からは異文化適応に関して、語学力・コミュニケーション能力はそれほど重要な要因であるとは言い難い。

② 性格については､心理学調査で使われる英文の人格目録 (Personality Inventory)も参考にしながら本研究に関係あると考えられる項目を抽出しアンケートによる調査を行った。被験者は自身の性格について明確に積極的な性格だとは回答していないが、概ねどちらかと言えば積極的だと考えている学生が多い。ただ、フォローアップ・インタビューでは、留学前消極的な性格であった（と思っていた）のが留学後かなり積極的になり､「新しい自分」を発見したと回答した学生が 5 名いた。今回の調査から性格については、重要な要因であると推測されるが、この要因については当初の研究計画には入っていなかったため、項目の妥当性について十分論議することはできなかった。今後、人格目録項目の再検討も含め性格に関する研究方法等について深めていきたい。

③ 異文化に対する態度についても平成 24（2012）年プロジェクト開始当初から留学した学生 2 グループを対象に 5 段階回答のアンケート調査を留学前に行っている。留学動機同様、留学を希望する学生の異文化に対する態度はそうではない学生に比べ、柔軟であり関心も高い。5 段階で 5 と 4 をポジティブな回答としたが、双方のグループ（2012 年秋出発組と 2013 年秋出発組）の平均は、前者が 4.4 であり後者が 4.2 である。
留学後のインタビューからも大半の学生が協定校の留学生及び現地学生との良好な関係を築いた要因の一つがこの異文化に対する柔軟な態度であることが伺えた。

(4) 欧米の大学に留学する日本人学生の人間関係構築過程の解明を目的に研究を開始し､2012 年から 1 年間の留学生活を送る日本人学生を対象に縦断的に調査してきた。本研究の方法は被験者の数が多くないので量的分析方法より質的方法を選び分析を試みてきたが、いくつかある質的な研究方法の中で、何を用いるのが適当なのか検討する必要がある。今後のデータ分析方法については、「KJ 法」、「グラウンデッド・セオリー・アプローチ」、量的・質的方法の両方の利点を持つと言われる「PAC (Personal Attitude Construct)法」等のような方法が考えられるが、今後、質的研究方法についてさらに検討したい。また、被験者数がある程度増加すれば、5 段階スケールで行ったアンケートを統計学的に分析する

ことも可能となる。ただ、質的方法と量的方法はそれぞれ一長一短があり、研究方法そのものの本質的論議は今後の重要な研究課題としたい。

＜引用文献＞

英文文献

① Deci, E. & Ryan, R. (Eds.) (2002) *Handbook of self-determination research*, Rochester: University of Rochester Press.

② Deci, E., & Ryan, R. (2008). Facilitating optimal motivation and psychological well-being across life's domains. *Canadian Psychology, 49*, 14–23.

③ Dornyei, Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.

④ Dornyei, Z. (2001). *Teaching and researching motivation*, Harlow: Longman.

⑤ http://www.humanmetrics.com/cgi-win/jtypes2.asp

⑥ http://www.outofservice.com/bigfive/

和文文献

① 木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂

② 工藤和宏（2003）「異文化友情形成におけるコミュニケーション能力−留学生の知覚に基づくモデル化の試み」『ヒューマン・コミュニケーション研究』第 31 号、15-34.

③ 工藤和宏（2003）「友人ネットワークの機能モデル再考−在豪日本人留学生の事例研究から」『異文化間教育』18,95-108.

④ 佐々木泰子・張喻珊・鄭士玲「中国人留学生は日本人との友人関係をいかに構築しているか　−修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチに基づく視点提示型研究−」『異文化間教育』35、104-117.

⑤ 佐藤郁哉（2011）『質的データ分析法　原理・方法・実践』新曜社

⑥ 高井次郎（1994）「日本人との交流と在日留学生の異文化適応」『異文化間教育』第 8 号、106-116.

⑦ 高濱愛・田中共子（2012）「日本人留学生の帰国後のケアを目的とした自助グループ活動」『異文化間教育』35、93-103.

⑧ 中島智子(2012)「異文化間教育研究とインタビュー法」『異文化間教育』35、32-49.

⑨ 山川史（2013）「寮に住む留学生と日本人学生の友人関係構築に関する事例研究」『異文化間教育』38、100-115.

⑩ やまだようこ（2007）『質的心理学の方法：語りをきく』新曜社

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

① 隈本・ヒーリー順子, 「欧州の大学に留学する日本人学生の人間関係に関する事例研究」『第 27 回日本語教育連絡会議論文集』査読無、2015 年 pp56-64.
http://renrakukaigi.kenkenpa.net/ronbun27.html

② 隈本・ヒーリー順子,「日本人学生の海外留学動機づけに関する要因」『大分大学国際教育研究センター年報 2012 年度』査読無、2013 年　pp59-67.

〔学会発表〕〔計 5 件〕

① 隈本・ヒーリー順子,「欧米の大学に留学する日本人学生の人間関係に関する事例研究」日本語教育連絡会議　2014 年 8 月 23 日～24 日、バラトンサールソー市（ハンガリー）

② 隈本・ヒーリー順子,「Motivating Japanese Students and Sustaining Their Motivation:

Interactions during the Period of Study Abroad」NAFSA、2014 年 5 月 25 日—30 日サンディエゴ市（米国）

③ 隈本・ヒーリー順子, 「Intercultural Adjustments: Negotiating with International and Local Students at Dutch Universities」2014 年 3 月 5 日—7 日 ティルブルグ大学（オランダ）

④ 隈本・ヒーリー順子, 「Interactions between Japanese Students and Local Students at Paderborn University」, The Intercultural Communication Seminar, 2014 年 3 月 12 日—15 日　パダーボーン大学（ドイツ）

⑤ 隈本・ヒーリー順子,「欧米の大学に留学する日本人学生の留学動機–言語学習理論を使って」日本語教育連絡会議　2012 年 8 月 6 日～7 日、エアフルト大学（ドイツ）

６．研究組織

(1) 研究代表者

隈本　順子（KUMAMOTO, Junko）

大分大学・国際教育研究センター・教授

研究者番号：60336245